

心理学・人間科学メタ理論の新展開

ワークショップオーガナイザーによる主旨

今年(2009)の夏、アメリカ心理学会 (APA) において”Theorizing pluralism” というシンポジウムが行われ、私も”Metascientific foundations for pluralism in psychology”という題で話題提供を行った。1960年代以降、次々と新心理学が登場し、多様化断片化の一途を辿っているという心理学の現状を踏まえ、近年 APA では unity-disunity debate、すなわち、単一パラダイムによる統一か複数パラダイムによる多元主義か、という論争が続いている。その歴史的根源の一つが、19世紀末の、ディルタイ、ブレンターノらによる、自然科学とは異なる方法 (解釈学・現象学) による心理学の構想にあることは言うまでもない。

私の年来の主張は、存在論的—認識論的—方法論的—科学心理学的という4水準からなるメタサイエンスによって、多元主義をメタ理論的に基礎付けんとするところにある。詳しくは、渡辺の提題 (心理学的多元論のメタサイエンス) を参照して欲しいが、そこでなされている心理学の諸潮流のメタサイエンスによる分類・考察には、歴史的具体的な軸が欠けている憾みがあった。

その点、伊藤は、人間科学 (Geisteswissenschaft) を構想したディルタイのメタ理論が、なぜ20世紀心理学の歴史的展開から拒まれていったかを、創成期の実験心理学者エビングハウスとの論争の検討を通して、思想史の立場から解明しつつある。

自然科学ではない方法による人間科学の流れは、社会学や人類学でまず復興し、1980年代に心理学にも波及し、日本でも近年の質的心理学研究の興隆を見るに至っているが、その中心となるメタ理論は社会的構成主義にある。具体的にディスコース分析として自前の研究を進めている鈴木によって、その紹介・検討がなされるだろう。

渡辺の提題では、心理学の諸潮流の暗黙のメタ理論を、メタサイエンスの観点から解明するが、その結論は、「人間一般、心一般などというものは存在せず、心は多型存在であるが故に、心理学も多型となる」、ということになる。

心理学・人間科学メタ理論の新展開は、西条にも見られる。認識論や現象学ではフッサールと竹田青嗣、存在論ではロムバツハ、記号学ではソシュールと丸山圭三郎、構造論と科学論は池田清彦といったように、現象学、存在論、認識論、記号学、構造論、科学論、といったそれぞれの領域の諸成果を人間科学のメタ理論として有機的に統一した「構造構成主義」を創唱しているのも、その立場からのメタ理論へのアプローチを期待したい。

科学基礎論学会においては、英米分析哲学系のメタ理論が従来まで中心であったが、以上みるように、人間科学メタ理論の潮流は、現在では大陸系の現象学・解釈学の流れが英米へも流入し、後期ヴィトゲンシュタインやライルの流れとも交差・交流しつつ、新展開をとげつつある。本ワークショップは、このような新展開への、当学会初の本格的なアプローチとなる筈である。

(オーガナイザー：渡辺恒夫)